

デッドボールで塁に出よう！



吉野知子

東京農工大学大学院工学研究院生命機能科学部門
[184-8588] 小金井市中町2-24-16
教授, 博士(工学).
専門は生物工学.
y-tomoko@cc.tuat.ac.jp
<http://web.tuat.ac.jp/~biomol/>

本稿は、もともと恩師である松永 是先生(現 海洋研究開発機構 理事長)との対談形式を予定していた。が、男女共同参画に関する対談を恩師と行うのは照れ臭いのと、コロナ禍でもあることを理由に、今回は単独で執筆させていただくこととし、女性研究者を数多く輩出された恩師の教えを交えながら、自身の研究者への道筋を紹介したい。

私の人生を大きく決定づけた出来事は、まさに大学4年生の松永研究室への配属であろう。工学部の研究室としては珍しく、その当時から博士課程に女子学生が進学し、また助手や技官の先生方も女性であった。周りにはさまざまな世代のロールモデルが実在し、実は工学分野に女性研究者が少ないということを知らずして、私の研究者の道はスタートしたわけである。今にして思えば、どんな支援体制よりも、この環境こそが女子学生のキャリア形成に必要なことであるとを感じる。そして恩師である松永先生は、私が研究室に配属するずっと前からこうした環境を整えてこられ、東京農工大学での35年間の研究活動において、約60名の博士を輩出し、その中からすでに女性教授を4名誕生させ、現在もそのタマゴが育ちつつある(もちろん男性教員も多数輩出)。時折、他大学の先生から、「松永先生はどのように女性研究者を育成していたのですか」と聞かれることがある。女子学生に向けて何か特別な教育をしているのか、という問いであるが、むしろ特別なことは何もない。松永先生の教えは、研究室に入った学生は男女の別なく一人の研究者として扱うところから始まる。そして学部4年生であっても、自身の研究テーマに関しては研究室の誰よりも詳しい専門家になりなさい、と刷り込まれてきた。

「バットを持ったらデッドボールでも良いから塁に出るんだ!」というのは、研究ディスカッション中に言われた松永先生の名言録の一つである。その言葉を鵜呑みにして研究者の道に進んだ私は、デッドボールの連続でここまで来たようなものだ。そして、何度も塁に出るチャンスを与えていただいた。学部4年生から国内外の学会で口頭発表を行い、留学、企業との共同研究、学会運営や申請書の作成、さらにはベンチャー企業の社長まで、さまざまなことを学生時代に経験さ

せてもらった。下手だろうと、能力がなかりうと、デッドボールでも良いから塁に出れば、点につながる可能性は出てくる。そんな日々を送り、気づけば学位をとって2年も経たずして、生後3カ月の乳飲み子を抱えながらの無謀とも思えるテニュアトラック准教授の公募に挑戦し、ついにはポジションをいただくことができた。その公募を勧めてくださったのも、もちろん松永先生である。こうして、デッドボールではあるが何とか研究者として塁に出ることができた私は、多くの方々の支えにより、その後テニュアを取得し、現在も研究を続けることができている。

私は昨年、10年振りに出産した。長男も高校生になるし、そろそろ子育てを卒業して研究に没頭する日々が始まるかと思った矢先の3人目の誕生である。研究室を主宰し、授業や学内外の業務が一段と増え、研究プロジェクトのリーダーや学会の理事、文科省の学術調査官など、人生最大級に忙しい日々を送っていたので、周囲の驚きも大きかったし、何より自分自身も少々焦った。が、何とかなるものである。今は10年前と違い、1歳の娘が食事のお皿をひっくり返そうが、椅子にクレヨンで落書きを始めようが、笑って見ている余裕もでき、原稿を書く時間も作れるようになった。

日本における男女共同参画については、半ば強制的にでも進めなければ、日本の根強い風潮の下では女性研究者の比率は増加しないだろう。一方で、追い風となる制度設立・改革によりさまざまな面で女性研究者のチャンスが増えているのも事実であるのに、このチャンスを活かしてきれていない現状は何とも歯がゆい。今必要なのは、ホームランでなくてデッドボールでも良いので、多くの女性研究者が塁に出て、そしてホームに帰ってくることはないか。私自身、まだデッドボールが多いが、最近はヒットを打てるようになり(勘違いかもしれないが)、そしてこれからもホームランを打つために日々挑戦していきたいと思っている。若い女性研究者の皆さんにはたとえデッドボールでもチャンスを活かしてとにかく塁に出る勇気をもつことを、そして周りの皆様にはそれを温かく見守っていただくことをお願いしたい。